小林多喜二について若干の文献など

倉　田　　稔

もくじ

はじめに
1　吉田隆子
2　畑中康雄の書
3　小樽文学館における遺体写真の撤去
4　最近の研究の若干
5　新しい石碑と金属プレート
6　その他文献などの紹介
7　新発見の小説「老いた体育教師」

はじめに

戦前の日本では、寄生地主制、天皇制が強固で、貧富の差が大きかった。戦後は、農地改革が行われ、資本主義が発達し、貧富の差が、戦前のように目に見えるようには感じられなくなった。そこで、戦前は治安維持法のような法律があるにもかかわらず、小林多喜二のような活動家で排出した。

小生が『小林多喜二伝』（論創社　2003 年）を出版してから、いくつか補遺を書いてきた。これはそのうちの 1 つの続きである。

1　吉田隆子

吉田は、1910 年に東京で生まれた。作曲を、橋本国彦、菅原明朗に、ピアノをローゼンスタントに学んだ。21 才で、「カノーネ」を『音楽世界』に発表した。久保栄と結婚した。「小林多喜二追悼の歌」（ソプラノ・バリトン）を作曲した。未完成オペラ・小宮編著『君死にたもうことなかれ』（新宿書房　2005 年）、がある。

2　畑中康雄の書

畑中康雄『小林多喜二　破綻の文学』（彩流社　2006 年）が出た。本書は「プロレタリア文学再

考」と副題が付けられており、それにふさわしい。

本書は、多喜二の有名な文学作品を俎板に載せて、それを批判したものである。

著者は、「人を殺す犬」「防雪林」「東倶知安行」を良いと評価する。一方、「不在地主」「工場細胞」「オルグ」「地区の人々」「当生活者」の破綻を指摘する。「蟹工船」にも 1 つの大きな疑点がある、とする。また「一九二八年三月十五日」を彼の傑作とする。これは小生と同じ意見なので、頼もしい。

著者の批判は、一見、従来の通常の「ブルジョア的」批判の系列と同じように見える。だが、著者の批判は観念的ではなく、作品それぞれに内在して吟味しているから、それとは違う。これらは説得力がある。要するに、小林多喜二は実際の運動をよく知らなかったのだという。労働者・農民の実際の闘いの内容は知らなかったのだ、と。これはありうる。実際、彼が共産党に入って活動したのは、1 年余であり、実際は労働組合で活動していたわけでもないから、この意見は妥当である。今後、この著者の指摘を吟味する必要がある。

3　小樽文学館における遺体写真の撤去

小生は次の文を発表した。「小林多喜二論（連載 78)」(『らぶおたる』坂の街出版）である。

「市立小樽文学館の、多喜二遺体写真の撤去

『北海道新聞』の、今年、二〇〇二年四月二二日の夕刊（11 面、小樽・後志版）に、市立小樽文学館で、多喜二虐殺の写真外す、という標題の記事が出た。副題に、一月の紀宮さま訪問時、とある。

どうやら、こういうことである。今年、二〇〇二年、紀宮さまが北海道旅行で、市立小樽文学館（小樽市色内一）を訪問した際、同館が常設展示していた小林多喜二の虐殺の模様を伝える遺体写真のうち一枚を取り外していた、というのである。

それが四月二十二日に分かった。この写真はその後も展示されていない、とある。

写真は紀宮さま訪問の直前に取り外され、同館の学芸員がその経緯を、市民グループ「小樽文学舎」のホーム・ページに公開した、と。

それによると、写真を「むごたらしい」「人間の域をはみだしている」とし、それを紀宮さまや一般来客者向けに展示することに「どうしてこんな理不尽な悲しみを、痛みを、つきつけねばならないのか」と疑問に感じたことを挙げている、と。

その上で、「誰にいわれたわけでもない。ほのめかしもない」と、外部からの圧力はなく、独自の判断で取り外したとしている。

これはおかしい。議論がさかさまである。

まず、写真をむごたらしいと見ている点である。これは話が転倒している。写真はむごたらしいかもしれないが、それは、戦前の特別高等警察の行為がむごたらしかったのである。また「人間の域をはみだしている」というのは、写真がそうなのではなく、特高がそうだったのである。

これらは歴史的事実である。たとえば、原爆記念館で、被爆者の写真がむごたらしいからといって、その写真を隠匿するとしたら、その記念館はほとんど価値はなくなる。

「理不尽な悲しみ」や「痛みを」、日本人民も与えられたのである。これらの事実を示すことは、文学館としては必要である。

前後関係から見て、多喜二の遺体写真を取り外したのは、紀宮さまが来館されるから、ということと結び付いている。聡明なひとだから、理解できるし、考えるであろうと推測する。紀宮さまにも失礼であろう。

今回の行動は、天皇制が強く残っていることも示している。天皇制はきれいごとだけを表に出すことになっているから、取り外しはそれを守ったのであろう。

実際は、お役人の事なかれ主義がそうさせたものである。

写真の取り外しには、思想的な理由はないと強調している、とあるが、もちろん、そういうわけで、お役人主義と、天皇制、という理由がある。相当政治的な判断である。

そして、事実と歴史をすこしでも展示しようという、科学的･合理的な態度を、公立の博物館･美術館・文学館が持っているとすれば、市立小樽文学館はそれを捨てたのである。これは責任がある。文学館は、きれいごとの写真しか展示しないと決めたのであろうか。

少なくとも、市立小樽文学館の最も目玉となる「商品」を、展示から隠してしまった。これは、来館者にとっても文学館にとっても、損失である。なにしろ日本史上、多喜二の虐殺は有名な事件だからである。この写真を見て多くの人は、歴史に対する正しい認識を持つのである。」

4　最近の研究の若干

小生の膨大な研究『小林多喜二伝』（論創社　2003 年）が出てから、幾つかの研究あるいは発表がされ、そのうち、特筆するものを幾つか紹介したい。

私の研究が出るころ、多喜二生誕 100 年だったので、いくつか研究書がでた。だがそれらは、時間的な余裕がなかったのか、あるいは他の理由で、私の研究を採り入れていない。その例外は、つまり採り入れているのは、

浜林正夫『小林多喜二と其の時代』（東銀座出版社）である。

なお、同じ浜林先生は、私の書の非常に素晴らしい書評を出した。浜林正夫「書評：倉田　稔『小林多喜二伝』」（『人文研究』110 輯）である。

私の調べの後、2 つの重要な調べと資料がでた。スパイの評伝である。また近藤栄作の回想で

ある。この 2 つは前稿で少し紹介した。

東京で 2 回のシンポジウムが開かれたことは、多喜二研究にとって大きい。白樺文学館：多喜二ライブラリーの主催であった。そして、いわば第 3 回のシンポジウムが、中国：河北大学で開かれた。

その記録は、『いま中国によみがえる　小林多喜二の文学』(東銀座出版社) である。

そこに出なかったが、その参加記のうち 3 つは、『緑丘』(99 号) に出た。

最後に、次の特集が出た。

『「文学」としての小林多喜二』(『国文学　解釈と鑑賞』別冊　至文堂　平成 18 年、2006 年) である。

シカゴ大学のノーマ・フィールド教授が、多喜二の英訳本を準備しているそうで、心強いかぎりである。

5　新しい石碑と金属プレート

新しくできた JR 小樽築港駅の国道側に、小林多喜二を記念する、金属プレートをはめた小さな石碑が出来た。多喜二家住居は、現国道の車道になってしまった。だからこれは、その地そのものではないが、家には 1 番近い場所である。ここに木の標柱が立っていて、それを撤去したものである。駅は昔はより札幌寄りだった。多喜二家から 100 メートル離れていた。

この金属プレートは、こうある。

「小林多喜二

(1903-1933)

住居跡

(旧　若竹町十八番地)」

碑文は縦書きで、こうある。

「明治末期、秋田から移住した小林多喜二の一家は、鉄道線路を背に、小さなパン屋を営んでいた。

当時、家の裏手は築港の工事現場で、タコと呼ばれた土工夫が過酷な労働にあえぎ、非人間的なタコ部屋に押し込まれていた。その実態は多喜二の心に深く焼きつけられ、後年「人を殺す犬」「監獄部屋」などの作品を生んだ。秀作「同志田口の感傷」の姉弟が鰊漁で湧きたつ熊碓浜 (東小樽) へ行くのもこの家からである。

緑町の小樽高商 (現小樽商科大学) へは、四キロの坂道を歩いて通った。勤め先の北海道拓殖銀行小樽支店へは、築港駅から旧手宮線色内駅まで汽車で通勤した。」

この碑文は専門家が書いたと言われるが、一体誰だろうか。2 つの点で良くない。こんなに短い分量なのに、無駄があり、必要なことが書かれていない。「人を殺す犬」「監獄部屋」は、ほと

んど同じであり、どちらかでよい。また「蟹工船」や「不在地主」など主要で有名な作品はここで書かれたのに、それらがない。

6　その他文献などの紹介

その他の文献を紹介しよう。

小林多喜二をふるさとで読む会編『多喜二と生地（大館）――その文学と読書会』秋田ほんこの会　2006 年。ここには、秋田時代の論攷がある。

『小樽社会史国際研究所紀要』、小樽社会史国際研究所発行　創刊号（2006 年）で、多喜二書き込みの発見者・渡邊理により、その経過が書かれた。

ドナルド・キーン『日本文学の歴史』12 巻　中央公論で、多喜二を論ずる。

『蟹工船』（舵社）が大きい字で出た。

藤田廣登「多喜二の盟友たち」

原作　小林多喜二、作画　藤生ゴオ『マンガ　蟹工船』東銀座出版社　2006 年。ここには、島村輝の解説がある。

映画『小林多喜二』に続いて、映画『時代（とき）を撃て、多喜二』が作られた。劇では、『母』、『早春の譜』がある。

7　新発見の小説「老いた体育教師」

曽根博義先生が、小林多喜二の小説を新しく発見した。「老いた体育教師」である。この経緯は、『舢板』（さんぱん）第Ⅲ期　第 13 号、2007 年 3 月、EDI 発行、所載の曽根論文「雑誌『小説倶楽部』と小林多喜二」で紹介された。

全文は、日本大学国文学会『語文』127 輯に曽根先生の解説と共に発表された。